

【宮城県牡鹿郡女川町の方言概観】

ここでは、今回の会話集に現れた特徴を中心に、伝統的な女川町方言の音声や文法を概観していきます。

㊦ 音 声

【子音】

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは平たく言えば、単語の頭以外にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になることです（専門的に言えば、（有声）母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になること）。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません（下の例で言えば柿は「ガギ」にはなりません）。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ
タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞単語の頭以外にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルになってしまい、「上げる」と混同しそうですが、「上げる」のほうはゲが鼻にかかった音（鼻濁音とも言い、この現象を鼻音化と言います。ここでは「ケ°」のように半濁点で表記します）のアケ°ルとなり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アケ°ル

で両者の混同は起こりません。同様にダ・ザ・バ行も鼻音化します（ここでは「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記します）が、これらは衰微が著しく、高年層からも聞かれないことがあります。

例) ガ行：上げる → アケ°ル
ダ行：肌 → ハンダ

ザ行：風 → カンゼ
バ行：首 → クンビ

▼キ（キャ行）の口蓋化

キが「チ」に近く発音される。また、キャ、キュ、キョも「チャ、チュ、チョ」と似たように発音される。

☞一般的にはこれは「口蓋化」の一種と見られています。口蓋化とは舌の前の部分が上あご（硬口蓋）に接近する現象を言います。キがキとシの中間のような音になるとい、似た現象は東北一般で見られますが、女川町では極端な口蓋化が起こってチに近くなります。また、口蓋化と有声化が一緒に生じてキがジのような音になる例も聞かれました。

例) チーツケデ（気[を]つけて）
チノフロ（木の風呂）
ユジ（雪）

【母音】

▼イとエの統合

イとエが同じ発音となる。

☞母音単独で発音されるイとエは区別されず、ともにエに近い音になります。

例) 息（いき）、駅（えき） → 両方ともエギ
鯉（こい）、声（こえ） → 両方ともコエ

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象（またはその逆も）を「中舌化」（ちゅうぜつか、なかじたか）と言いますが、宮城ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミとム、リとルなどが互いに近い音になります。これらは一応の区別がありますが、シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」と発音され、これらは区別がありません。

例) 獅子（しし）、煤（すす）、寿司（すし） → すべてスス

知事 (ちじ)、地図 (ちず)、辻 (つじ) → すべてツズ

▼その他、以下のような特徴もあります。

- ・ヒの音がシに近い音となる。以下は女川町の会話集からの例です。

例) シノコ (火の粉)、ナマゴシギ (なまこ引き)

- ・セの音がシェに近い音となる。以下は女川町の会話集からの例です。

例) シェンシェ (先生)、オシェワサマデス (お世話さまです)

¶ アクセント

女川町はアクセントの型を持つ有型アクセント地域である。

☞例えば「箸」と「橋」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハとシの音の高低が決まっていて (=型がある)、それによって単語の区別がつかます。

¶ 文法

【格助詞】

▼共通語の「が」、「を」にあたる格の格表示

共通語の「が」「を」にあたる格助詞を使わないことが多い。

☞共通語の「が」のような主格を表す助詞や、「を」のような目的格を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることが多いです。

例) 主格 : 俺 行く (俺が行く)
目的格 : 酒 飲む (酒を飲む)

▼「サ」

「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところが多いですが、存

在の場所を表す「ここサある」は言えないなど、その用法は「に」とは若干の違いがあります（ただし、若年層では存在の場所を表す「サ」も使えるという報告もあります）。

例) 東京サ行く
おれサ貸せ
見サ行く

【助動詞】

▼「べ」

共通語の「～だろう」（推量）や「～しよう」（意志）に相当する助動詞に「べ」がある。

☞「べ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。

例) 明日、雨だべ（明日雨だろう。） <推量>
明日は早く起きッペ（明日は早く起きよう。） <意志>
お祭り、お前も行くべ？（お祭り、お前も行くだろう？） <確認>
みんなでがんばッペ（みんなでがんばろう。） <勧誘>

▼「タ」「タッタ」

「タ」は共通語の過去・完了の助動詞「た」よりも用法が広く、現在目の前にあることの確認などにも使われる。

例) (私は今、) 学校にいる → 学校にイタ
(私は今、) 手紙を書いてる → 手紙をカイテタ

また、「タッタ」は過去の思い出など、現在と切り離された過去で用いられる。

☞「タッタ」は、「タ」と比べて過去の出来事が発話時に存在する場合には使われにくく（この場合は「タ」が用いられます）、過去の出来事が発話時に存在しない場合に使用しやすくなります。これを上記では「現在と切り離された過去」と表現しました。

以下の例で説明すると、①は昨日もらった桃が今もあるときの発言であり、これは過去の出来事が発話時に存在すると読みとることができます。このような場面では「タ」

が使われます。②は昨日もらった桃が今はもうないという状況であり、これは過去の出来事が発話時に存在しないと捉えられます。このとき、「タッタ」が用いられます。

例) ①きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタ。あんたも食べる？

②きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタッタ。

あんたが来るなら少し残しておけばよかったなあ。

<例文は竹田（2011）より引用>

【終助詞】

▼「チャ」

強調、当然、働きかけの意味を表す「チャ」が用いられる。

☞具体的には、相手が知っているはずの事柄を示し確認させるなどの機能があり、共通語の「だろ」「じゃない(か)」「よね」などのような意味を持ちます。

例) A 1 : ニショッコ (二燭光) って5ワットぐらいか。

B 1 : 60ワットぐらいだッチャ。(60ワットぐらいだろ。)

A 2 : え、そんなに光らないッチャ。(え、そんなに光らないだろ。)

★その他、以下のような特徴もあります。

・逆接既定条件(共通語の「けれども」)は女川町では「ゲットモ」が用いられやすいが、順接既定条件(共通語の「から」)は「ガラ」が用いられる。

・待遇表現は「ス」「(デ) ガス」「(デ) ゴザリス」「イ(ン)」などが用いられる。

例) ス : 取りス (取ります)

(デ) ガス : んデガス (そうです)

(デ) ゴザリス : おはよゴザリス (おはようございます)

イ(ン) : お茶でも飲まイン (お茶でも飲みなさい)

【参考文献】

加藤正信 (1969) 「東北方言概論」『言語生活』210

加藤正信 (1992) 「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院

- 佐藤亨（1982）「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
- 竹田晃子（2011）「テンス形式および文末の「ケ」の用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿岸地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救うー3.11 被災地からの提言ー』ひつじ書房